



鎧絵の龍をモチーフにした
オリジナルキャラクター「あけゴン」

紹介します、地域の居場所

第8回

「限界集落」としての再生 ～大屋町明延区・小林たばこ総合会館の挑戦～

兵庫県・養父市社会福祉協議会

協働の始まり

明延区は、かつて鉱山の町として栄え、最盛期には4,000人以上が暮らしていましたが、昭和62年に閉山。現在は約40人が暮らす「限界集落」です。高齢化率は70%を超え、買い物や移動など暮らしの課題が深刻化しています。

居場所のきっかけは、地域に愛された「小林たばこ屋の看板」でした。当時はたばこの販売のほかに、鉱山関係者が集う象徴的な場所でしたが、10年前から空き家となっていました。そのようななか2023年11月、看板に施された左官の鎧絵がSNSで注目を集め、「残してほしい」との声が高まりました。明延区長の「この場所を残したい」という思いも重なり、明延区、NPO法人但馬を結んで育つ会(以下、TMS)、宮崎県三股町社会福祉協議会のコミュニティデザインラボ(以下、コムラボ)、養父市社会福祉協議会(以下、市社協)の4者が協働して再生プロジェクトが始まりました。

4者がつながるきっかけは、市社協がTMSとコムラボの協働事業を見学したことでした。同事業は人口減少、過疎化、孤立・孤独化などの「見えない敵」と対峙し、明るい未来のために医療・介護・福祉・行政等の関係機関が連携して取り組む活動です。「明るい一揆」と称した斬新なキーワードで参加のハードルを下げ、「面白そう・ワクワクする」と感じる仕掛けが随所にありながら、根底には、「住民主体のまちづくり」「福祉の視点」などをひそませている、という点に深く共感しました。そこで、当時話題になっていた「小林たばこ屋」を結節点とし、活用を考える過程で4者のプロジェクトが始動。たばこ屋はTMSの代表が不動産取得しました。まさに“偶縁の縁が、地域を変える原動力”となりました。

笑顔をつなぐ、小林たばこ総合会館

プロジェクトの目標は、「人口が減っても笑顔で心豊かに暮らせる集落」の実現です。そして、区長の「この集落がたとえ5人になったとしても、みんなに笑っていてほしい」という言葉が、プロジェクトを動かす力となっています。

市社協としては、人口減少地域における“地域再生の実験場”かつ、地域の枠を超え、福祉・デザイン・まちづくりなど多様な分野が交わる“協働の実験場”としても位置づけ、地域の未来を共に描く「明るい一揆」を進めています。資金面では苦労しましたが、クラウドファンディングや補助金、プ

レイベント収益などで約840万円を集めました。

2025年6月、「小林たばこ総合会館」がグランドオープン。住民の店番ボランティアの協力を得て毎週火曜日に開館し、地元野菜や生活用品を扱う「明延購買部」、龍をモチーフにした鎧絵の「あけゴン」グッズを販売する「空想土産屋」を運営しています。オンライン診療「テレビ病院」の設置も準備中です。住民からは「毎週ここに来るのが楽しみ」「当時のにぎわいを思い出す」「たばこ屋がまた息を吹き返したみたい」との声も聞かれ、居場所として、住民同士の温かい交流が生まれています。

“限界集落”の挑戦

プロジェクトの大きな特徴は、「地域おこし遠隔隊」の存在です。北海道から宮崎まで14人がオンラインで関わり、デザインや広報、企画運営をサポート。地域の知恵と外部の視点をかけ合わせながら事業を推進しています。

また、空き家再生作業には、地域住民も参加し、「懐かしい」と語りながら解体やDIYに汗を流しました。会館は今、孤立を防ぐ「見守り」と交流の拠点となっています。

そして、この活動を象徴するのが「限界集落」という言葉です。「限界集落」の「落」を「楽」に変え、「限界を超えて、楽しいを集める場」という願いを込めました。地元を拠点に世界でも活躍する書道家による「限界集落」の揮毫が会館の襖に掲げられ、集落再生の決意を示しています。

今後は、会館を地域のつながりの拠点として定着させ、この理念をそれぞれの地域にあった形で広めていきたいと考えています。そして、明延から生まれた「限界集落」の挑戦を通して、人口減少時代の地域福祉の新たな可能性を全国へ届けていきます。



トタン屋根を塗装する
DIYボランティア



「あけゴン」のグッズを販売する
店番ボランティア

INFORMATION

案内 地域福祉推進委員会 会議資料

令和7年度開催の地域福祉推進委員会の各種会議資料を公開しましたので、ご覧ください。
※社協の役職員専用ページより閲覧可能。



雑誌紹介 月刊福祉1月号(2026年1月号)

特集:高齢者介護を取り巻く今とこれから

価格:1,170円(税込) B5判 104頁
超高齢社会における高齢者のニーズや介護の今を追い、高齢者介護を支えるうえで核となる介護保険制度の現状と課題を確認しつつ、2040年を見すえた高齢者介護を展開します。



編集後記

新年明けましておめでとうございます。皆さま、2025年はどんな年でしたか。わが家は子ども部屋を作るために10年ぶりの断捨離を行いました。卒業アルバムや思い出の品を久しぶりに発見し、眺めながらの作業は時間がかかりましたが、普段はゆっくり見られないものを見られて貴重な時間になりました。

三男は、4月に小学生になります。先日、自分で選んだピカピカのランドセルが届き、うれしそうに背負っていました。「タピオカミルクビー」「テールプ」「エベレーター」など、いまだに言い間違いの多い三男ですが、まだそのままでいてほしい気持ちもあり、指摘をせずいます。少しずつできることが増えていく半面、寂しさもある今日この頃です。(森)

>>>アンケート

今後の企画・編集の参考にさせていただきますので、読者アンケートにご協力ください。

